

日蓮大聖人御書全集

だいびやくごしやしよ

大白牛車書

新版
2151

だいびやくごしやしよ

大白牛車書

そ ほけきようだいに まき い ほうじよう じよう ただ

夫れ、法華經第二の卷に云わく「この宝乗に乗じて、直

ちじよう いた うんぬん にちれん けんちようごねんしがつにじゅうはちにち はじ

ちに道場に至る」云々。日蓮は建長五年四月二十八日、初

だいびやくごしや いちじようほつけ そうでん もう あらわ

めてこの大白牛車の一乗法華の相伝を申し顕せり。しか

しよしゆう にんしとう うんか 寄 きた そうろう なか

るに、諸宗の人師等、雲霞のごとくよせ来り候。中にも

しんごん じようど ぜんしゅうとう はち お 責 戦

真言・浄土・禅宗等、蜂のごとく起こり、せめたたかう。

にちれん だいびやくごしや うし つの さいだいいち もう 戦

日蓮、「大白牛車の牛の角、最第一なり」と申してたたかう。

りよう つの ほんじやくにもん にじようさぶつ くおんじつじよう

両の角は本迹二門のごとく、二乗作仏・久遠実成これな

こうぼうだいいし ほつけさいだいいち つの さいだいさん 直

り。すでに弘法大師は法華最第一の角を最第三となおし、

いちねんさんぜん

くおんじつじよう

そくしんじようぶつ

ほつけ

かぎ

一念三千・久遠実成・即身成仏は法華に限れり、これをも

しんごん

きよう

ほうぼう

やから

せ

真言の経にありとなおせり。かかる謗法の族を責めんと

かえ

あだ

そうろう

たと

つの

直

するに、返つていよいよ怨をなし候。譬えば、角をなおさ

うし

殺

そうら

んとて牛をころしたるがごとくなりぬべく候いしかども、

そうろう

いかで、さは候べき。

くるま

もう

ほんじやくにもん

わ

みようほうれんげきよう

そもそも、この車と申すは、本迹二門の輪を妙法蓮華経

うし

懸

さんがい

かたく

しょうじしやうじ

回

の牛にかけ、三界の火宅を生死生死とぐるりぐるりとまわり

そうろう

くるま

しんじん

轄

こころざし

油

候ところの車なり。ただ信心のくさびに志のあぶらを

差

たま

りようぜんじようど

詣

たも

しんのう

うし

ささせ給いて、靈山浄土へまいり給うべし。また心王は牛の

しょうじ りよう

わ

でんぎようだいしい

しょうじ

ごとし。生死は両の輪のごとし。伝教大師云わく「生死の

にほう いっしん みようゆう うむ にどう ほんがく しんとく うんぬん てんだい

二法は一心の妙用、有無の二道は本覚の真徳」云々。天台

い じゅうによ ないしこんきよう たい うんぬん

云わく「十如はただこれ乃至今境はこれ体なり」云々。

もんしやく

よ

よ

あん

たも

なんみようほうれんげきよう

この文釈、能く能く案じ給うべし。南無妙法蓮華經、

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經。

じゅうにがつじゅうしちにち

十二月十七日

にちれん

かおう

日蓮

花押